

自然

田の中の一筋のみち

郡山市から鳳坂峠ほうさかとうげを超えて会津若松市へ通じる道があり、通称長

沼街道と呼ばれている。戦時中、我が家やはこの街道の途中にある

八幡村やはたむらに疎開した。郡山市のわが家からは十二キロほど離れている。

当時、国民学校一年生の私は、母と一緒に何度かこの道を歩いて往復した。母はあるとき疎開先に私を置いてこの間を二度も往復した。

疎開といっても、生活に必要なものはすべて背負って運んだのだ。

この道は七歳になったばかりの私にとっては、懐かしい道と言うより疲労と空腹の道という印象が強い。

私もようやく仕事を離れ、気ままな時間が持てるようになった。

季節は良し、小さなりックにおにぎりとお茶を詰め、目的地の八幡神社めぐして歩き始めた。この街道は、途中新しく出来た舗装道路が数本横切っている以外、私の覚えている道筋とほとんど変わっていないかった。あの頃と違っていると言えば、凸凹の砂利道がすべて舗装道路になっていたことぐらいだろうか。途中、太く大きな一本松もあるべきところに、当時のままのっしと座っていた。この松は。

「万歳松」といわれ往来する人々の目安になり、休憩場所にもなっ

ていた。

約二時間近くかけて到着した八幡神社の境内は、子どもの頃には迷ってしまいそうな広さであったが、今佇^{たたず}んでみるとこじんまりとしていて村の鎮守様そのものであった。終戦の時に、詔勅で集まった大人たちが悔しきや哀しみの涙を流した社^{やしろ}である。境内には難しい言葉で神社の由来などが書かれてあったが、私の下半身の疲れはともかく帰路を急がせてた。愚かにも、私はかつて社の北を流れる鮒や鯰を釣った流れを確認しないまま帰路についた。疲労は、翌日から三日間、二階への手すりを必要とするものであった。子どもならば一晩眠れば回復する疲れもそう簡単には抜けない。年齢とは正直なものである。しかし、あの東西南北に広がる田園の風景は、思いの出の堀り起しもさることながら、全身疲労と引き換えにしても価値があった。

疎開先はS家といったが、一家六人が寝泊まりする場所は何と馬小屋の二階であった。家主は農業の傍ら馬車で荷物を運ぶ仕事をしていたのである。したがって馬を大切にし、馬の寝場所を移すようなことはしなかった。馬小屋といえばイエス・キリストが連想されるが、姉の長女（私にとっては姪）は、作り話ではなくこの馬小屋

の二階で生まれるというおまけまで付くことになった。ついでは、この姪は成長してもキリスト様にもマリア様にもなることはなかった。でも、戦後まで一家が無事で居られたのは彼女のお陰だったのかも知れない。

話を前に戻そう。私はこれに懲りて歩行を諦めマウンテンバイクを手に入れた。風雨の日以外はこのコースを日課とするようになったのである。流石に冬季は遠慮したが、春、夏、秋と移り変わる風景は、一人で味わうには勿体ないほどの景色である。あるとき、田の中を一直線に西に向かう舗装されたあぜ道を見つけた。自動車は無論、人もほとんど通らない。贅沢ぜいたくにも私の専用道路のようなものなのだ。

春、微風そよかぜ、それまでの黒土は耕され、水の張られた田んぼは、鏡となり、奥羽の山脈の向こうに残雪の磐梯山が頂を覗かせ、逆さ額縁がくぶちにして見せてくれる。

初夏、薰風くんぷう、弱々しかった早苗はすっかり存在感を増し、空に向かって青葉をぐいと伸ばし、根元にはおたまじゃくしやザリガニを遊ばせている。

秋、錦風にしきかぜ、実った稲穂はいつの間にか刈り取られ、土肌がまた現

れる。この一本の道の向こうには、衣替えした山々が、指呼に近づき、これが自然の推移というものだったのだと気づかされる。

待てよ、「これは自然以前の景なのかも知れない」日本の古典文には「自然」という言葉が全く出てこない。「自然」は漢語だからであろう。もともと農耕には「自然」という語はなじまない。農作物はどうしても人の手と天候という神の助けが必要なのだ。現在は殆んど使われなくなったが「随神」かんながらや「帷神」とぼりかみの語は要約すれば、人間の努力に加えて神の手助けが必要だという日月帰順の心が加わっていたと思われる。

なるほど、我々日本人は四季と一体となって暮らして来たので「自然」という言葉を必要としなかったのである。自転車でゆつくりと走る田の中の一本道は、いろいろなものを見せ、教え、考えさせてくれる。先人は四季の移ろいという形で、ゆかしい景を現代に残してくれたのかも知れない。

今年平成二十四年の八十八夜は、太陽暦五月一日であった。去年は原発事故の影響でこの地でも耕作しない田畑があったが、今年は一面にさみどりが広がっていて、日本の初夏らしい風景が見られた。日本の初夏はさみどりが一番似合う。